

大阪芸術大学の ソルフェージュ30年の歩み

志賀 眞知子

はじめに

本年1998年は、音楽学科設置30周年の年である。設置時、学科は音楽学、作曲、音楽工学、音楽教育学、演奏の5つの専攻に分かれ、設置4年目より音楽教育学科、演奏学科が加わり、音楽系3つの学科がそれぞれ少しずつ専攻（現コース）をふやし、現在に至っている。音楽系3学科は、それぞれ独自のカリキュラムを持つのであるが、この中で共通に履修する基礎的な演習科目を音楽基礎科目と呼んでいる。音楽基礎科目には、現在、基礎和声法1、基礎和声法2、基礎作曲法、対位法、鍵盤和声法、ソルフェージュ1、ソルフェージュ2の7つの科目があるが、主として音楽学科が中心となって授業や試験を運営してきた。ここで現在までの、カリキュラムから見た30年の変遷を、ソルフェージュに科目を絞って振り返ってみた。

1. ソルフェージュ30年の歩み

まず、履修単位の変遷を30年分俯瞰できるように表にしてみた。（図表1）

音楽学科設置の翌年44年から47年までは非常に単位数も多く、基礎科目の中でも特に力を入れていたことがわかるが、昭和50年より極端に軽減されている。

本来ソルフェージュは11世紀前半イタリアのグィード・ダレッツォが教会旋法より考案した階名（ド、レ、ミ……）で旋律を歌うという意味を持っているが、今日では関連

する基礎的学習をも含めてこの科目名を使っている。本学では音楽学科設置より聴音と視唱を中心に授業を進めてきたが、単位の増減、授業と試験の内容、又その方法の検討、改正、教科書作成等30年の歩みを三期に分け、履修単位表とあわせて、特筆すべきことを具体的に辿り、将来へ向けて更に何が必要か検討したい。

1期）昭和43年～49年

学科設置の年度生はソルフェージュは1年次2単位のみであったが、それ以後昭和47年度入学生までは1年次に必修4単位、週に2コマの授業があり、44年度は専攻により、45、46年度は2年次3年次にも全員2単位ずつ必修、44、45年度音楽教育学専攻、46年度音楽教育学科は4年次にも2単位必修と、ウェイトが大きくかかっていた。47年度には3学科全員の学生にソルフェージュを1、2年次に4単位ずつ必修で履修させる、又、この年から3、4年次には特殊ソルフェージュ演習2単位ずつを選択で開講し始めるなど、非常に熱心に取り組んでいた時期であった。48年度は1、2年次必修の4単位が2単位必修2単位選択と少し軽減させ、49年度は48年度と同様であるが、特殊ソルフェージュはこの年度入学生で最後となった。

ソルフェージュの授業の内容は、主としてさまざまな難易度の単旋律聴音、比較的やさしい複旋律聴音（主として2声）、四声体和声の聴音、教員が板書したりプリントした新曲視唱、音程の訓練、伴奏づけ、移調唱や移調奏であった。これらの授業内容は引き続き現在まで行われている。又、45年度入学生までは学生数も少なかった

のでクラスを2分し、聴音と視唱を45分ずつに分け、担当教員も入れ替わって授業をしたりしたが、その後は学生数の増加に伴い、その方法はとらず、現在まで1人の教員が90分間（平成10年度は80分間）上記の多くの内容を適宜とりあげて授業を進めている。

2期) 昭和50年～61年

昭和50年から57年まで音楽系三学科全員がソルフェージュ1のみ必修で、2～4年次はそれぞれ2単位すべて選択となった。58年には音楽教育学科がA、Bコースに分かれ、平成4年まで他の2学科と違い、4年次の選択2単位はない。この2期は学生数も大幅に増加した時期で、53年、56年はソルフェージュ1は13クラス、その後60年まで11クラスでというクラス編成で細やかに指導していた。又、この時期から現在に至るまで、移動ドの学生のクラスも必ず1つか2つ作り、専門の教員が指導し、移動ド固定ドの自覚ができない学生にも対応するように指導教員を配してきている。又、この2期から特殊ソルフェージュ演習という科目はなくなったが、選択となったソルフェージュ2に、56年よりその内容がひき続き含まれ、高度な視唱、3声の聴音、アルト譜表を混じえた2声の聴音等を学習させている。ソルフェージュ3では細分化された難しいリズムの旋律聴音、アルト、テノール譜表を使った2声の弾き歌い、その移調等高度な内容であった。

この時期の特筆すべきことは、昭和59年4月に音楽基礎科目グレード委員会が組織されたことである。この委員会は音楽系三学科所属の基礎科目担当教員を委員とし、委員長、副委員長、常任委員を置き、助手が書記として参加することとなった。常任委員は教科担当、教務担当、試験担当の三委員である。

委員会の職務はグレード、教科、教材、試験の各内容の審議検討と時間割作成、クラスの編成、授業や試験の運営、試験の実施と採点、成績の判定と提出である。この組織成立により各委員の業務分担が明らかになり、授業や試験の運営がスムーズに進められるようになった。グレード委員会は平均して1年に5回位開かれ、上記の事項を審議しているが、毎年度初頭には非常勤の基礎科

目担当教員を含めた基礎科目全体会議を開き、シラバスや試験の予定、内容の確認などを行っている。

3期) 昭和62年～平成10年

2期の昭和58年度から平成4年度まではひき続きカリキュラム上では同じであるが、昭和63年度よりソルフェージュ2が教職必修科目となり、3年次終了時に取得できているならば4年次に教育実習を履修することができる条件のひとつとし、現在に至っている。又、平成5年度より音楽系三学科全員の学生がソルフェージュ1のみ必修、ソルフェージュ2は教職必修、ソルフェージュ3、4はカリキュラムから削除した。これはこの年のカリキュラム改正で専門科目の整理削減が計られた為である。

昭和62年度は懸案の教科書が作曲（現音楽制作）研究室により作成、レッスンの友社より出版され、これを中心に授業を進めていくこととなった。内容は見開き2ページでひとつのカデンツを中心に、旋律を水平に聴きとる、歌うのではなく、和声の厚みと流れを体得しながら学習していけるように、弾き歌い、2声の視唱、単旋律聴音、複旋律聴音のそれぞれの課題を配していて今までに見られない画期的な教科書であると言える。63年度からソルフェージュ2が教職必修となったために履修者数が多くなり、62年まで2クラスで主にフランスのノエル・ギャロンやジェルヴェの教材を使い、高度な弾き歌いを中心にして授業をやめ、教職ソルフェージュ5クラスと専門別ソルフェージュ2クラスという分け方で授業をすることとなった。

教職ソルフェージュは旋律聴音での和声感覚の養成、和音記号付け、弾き歌いの訓練、専門別ソルフェージュは種々の拍子、アルト、テノール譜表による視唱と聴音を中心にしてきた。クラス分けは主として管絃打楽器コースの学生のクラスと音楽学Aと作曲コースの学生のクラスの2つに分けた。前者のクラスではピアノ以外の楽器、例えばフルートを使って旋律聴音をしたりした。後者のクラスでは、バルトークの「ミクロコスモス」や後期ロマン派以降のドイツリートや日本歌曲より選び、色々なリズムや音程の視唱訓練をした。又、ベートーヴェンやワグナー、ラフマニノフの作品より抜粋した和声を聴

音させたりした。前述の教科書後半に混合拍子やアルト、テノール譜表を使った課題も多く、どちらのソルフェージュにもこの教科書は適用でき、これに各教員がクラスに応じて準備した課題をつけ加えて細やかな指導を行ってきた。その後平成3年度より、ソルフェージュ2は教職ソルフェージュ、専門別ソルフェージュのクラス分けをやめ、多くの学生が教職科目履修者であるので、それまでの教職、専門別ソルフェージュをあわせた比較的高度な内容をも学習する5クラス編成で現在に至っている。

2. ソルフェージュグレード

現在音楽系三学科で共通に行っている、ピアノ、声楽グレードと比べて音楽基礎科目は厳密なグレード制を実行することが極めて難しい。しかし、ピアノ・声楽のグレード制から見て、熱心な学生にとってグレードの上昇は向上心と技術、表現能力の錬磨の鍵となっている。又、教職科目履修者にとってピアノ、声楽とも6級以上のグレード取得が教育実習履修の条件であり、それが又、グレードへの集中性をもたらしている。その点からみて、基礎科目においても実際的なグレードを作ることが有益だと考えられる。そこで私なりにソルフェージュのグレード試案を作成した。テストとの対応を考慮したが大変難しく、実施にはまだまだ多くの改良修正が必要であろう。諸先生方の御意見、御指導を賜りたい。(図表2)

3. 将来への提言

常々、我々教員が感じていることであるが、ソルフェージュ能力に偏りがある学生が多い。それは主として、細分化した難しいリズムの聴音ができて基本的な歌う能力がないという偏りが多いということであるが、それには教える側にも少なからず責任があるのではないだろうか。ジョージ・ウェッジは「リズム・ソルフェージュ」の中で「リズム分割やリズム音型は人工的なもの、すなわち芸術創造の成果であり、それゆえ、知的なものである。」と述べている。複雑なリズムの音楽を書き取ることは頭脳を大いに使うが、書く時、又それを後で歌わ

せたり弾かせたりする時に拍を感じさせること、アクセントをつけさせること、ニュアンスを感じさせることをして、拍感覚を別な所に置き忘れないようにさせなければならない。応々に我々日本人は細かい部分を書けたり演奏できたりしても、演奏全体に、又、音そのものに弾力性がないのは、このリズム感、拍感覚を重要視していないからではないだろうか。

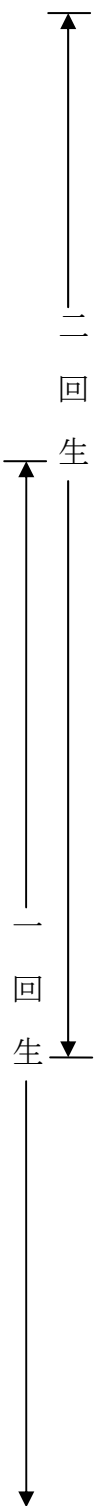
次に、青少年期から音楽を始めた学生への指導であるが、個人の才能と環境とが大いに関係する音感にあまり期待できない場合、和声や楽典の知識からのアプローチ、又、個々の音や和音への心理的アプローチは助けになるのではないだろうか。私は授業の中で、I-V、I-IV、V-VI、I-VIなどの和音連結を色々な調で弾き、和音連結を指摘させるだけでなくそのニュアンスを記憶させたり、種々の和音や音程の感覚的、色彩的印象を学生が自分なりのことばで表現し、記憶できるようくり返し演習させている。これはコダーイやトニック・ソルファの推進者カーウエンのいうところの「個々の音の精神的効果」にもつながるのではないだろうか。

又、もっとも重要なことであるが、その年度の授業の初めに、又その後も度々、ソルフェージュの目的を学生に告げ、自覚させるべきである。ソルフェージュの目的は、音高やリズムがわかるようになるだけでなく、フレーズを見極める、種々の終止感を記憶する、メロディの重心がどの音にあるかを判断する、アクセントや強弱を自分でつけられる、初見でその音楽の特徴がわかる、などである。音楽を演奏する際に、楽譜につけられた記号やことばより以前に、ソルフェージュの学習で身につけるべき強弱やアクセントの論理が実行されていなければ良い演奏とはなり得ない。ベルギーのサキソフォンの巨匠、D. ドゥファイエ氏が「私のレッスンはソルフェージュである。」と言われたように、ソルフェージュは様々な音楽的基礎を包括した表現の学習であると言える。感情表現を加えるまでの土台となる基本的な音楽づくりは、長い音楽生活のうちに身につくものであるが、ある程度まで、集中的にソルフェージュの中で修得させることができると私は考えている。

図表 2

ソルフェージュのグレード試案

	聴 音	視 唱
グレード級	取 得 内 容	取 得 内 容
1	・アルト又はテノール譜表を含む複雑な3声の旋律	・アルト又はテノール譜表を含む伴奏つきの新曲移調唱
2	・転調を含む四声体和声（開離） ・5、7、8拍子の単旋律	・アルト又はテノール譜表を含む伴奏つきの新曲ひき歌い ・5、7、8拍子の単旋律
3	・複雑な2声の旋律 ・借用和音を含む四声体和声（開離） 和音記号を付ける	・複雑な単旋律（無調部分を含む）
4	・分割リズムやタイを多用した複雑な単旋律  など	・伴奏つきの新曲ひき歌い（借用和音を含む）
5	・平易な2声の旋律 ・平易な四声体和声（密集）	・平易な2声の旋律 （低音部を弾いて高音部を歌う）
6	・増減音程を含む単旋律 リズムは $\frac{2}{4}$ で  $\frac{3}{8}$ で  など	・増減音程を含む単旋律 （半音階部分を含む） ・平易な伴奏つきの新曲ひき歌い
7	・長短6度7度音程を含む単旋律 リズムは $\frac{3}{4}$ で  など	左記に同じ
8	・完全4度5度音程を含む単旋律 リズムは $\frac{2}{4}$ で  など	左記に同じ
9	・長短2度3度音程を含む単旋律 リズムは $\frac{4}{4}$ で  など	左記に同じ
10	・完全8度、長2度音程を含む単旋律 リズムは $\frac{4}{4}$ で  など	左記に同じ



教職科目履修者は6級取得を条件とする